校歌の歌詞に関する言語学的研究
―倉敷市の公立学校の場合―

尾　崎　喜　光
杉　尾　瞭　子

1. はじめに

次に示すのは、筆者（尾崎）が学んだ上田市立第一中学校（長野県）の校歌である。学校設立は昭和22年（1947年）、校歌制定は昭和37年（1962年）である。

1　紫匂う烏帽子山　変らぬ姿仰ぎつつ
　希望を高くこの胸に　からだはいよよたくましく
　　光よ来たれ学舎（まなびや）へ　上田第一中学校
2　水上はるか千曲川　流れも清くひたひたと
　栄（は）えある歴史語り合い　我らは若し夢多し
　　光よ来たれ学舎へ　上田第一中学校
3　明るく楽し故郷（ふるさと）の　行く手は広く新しく
　自ら学びともどもに　励まし合わん朝夕を
　　光よ来たれ学舎へ　上田第一中学校

全体として分かりやすい歌詞であり、言葉として気になる点は何もないかもしれない。しかし、現代のJ-POPの歌詞や私たちの日常の話し言葉などと比較すると違いも感じられよう。たとえば1番の「変らぬ（姿）」は「変らない（姿）」の方がより普通であろう。また、2番の「若し夢多し」も「若い夢多い」、3番の「励まし合わん」も「励まし合おう」の方が普通であろう。しかし、校歌の歌詞として考えるならば大変自然に感じられ、何の違和感もない。

こう考えると、歌詞全体は現代風であるため普段意識されることはあまりないかもしれないが、校歌の歌詞にはじつは古典文法が随所に使われていることがわかる。こうした特徴は、本校の校歌のみならずいろいろな学校の校歌の歌詞に共通する特徴ではないかと考えられる。もっとも、学校種（小学校・中学校・高等学校の別）による違いや、校歌が制定された年代による違いもありそうである。最近設立された小学校の校歌であれば現代文法による「励まし合おう」も十分ありそうである。

こうした問題意識から、2014年度に筆者（尾崎）が担当した大学院の授業「現代語特論」では、受講者とともに校歌を多数収集し、言語学的観点から分析した。本稿はその分析結果の報告である。（尾崎）

2. 先行研究

本研究の調査概要および分析結果を示すのに先立ち、校歌の歌詞に関するおもな先行研究を概観し、本研究の位置づけを確認しておこう。

佐々木力（2007）は、秋田県の雄物川本流域にある小学校・中学校・高等学校217校の校歌を対象に、自然的環境要素という観点から分析した。その結果、歌われる頻度が高いのは「山」「学校名及び所在地名」「川」であること、特に「山」は86％の校歌で歌われておりそのうちの61％は「鳥海山」も歌っていること、「川」も60％の校歌で歌われておりそのうちの52％は「雄物川」を歌っていること、さらに所属感や一体感を生徒に持たせる「学校名及び所在地名」は74％の校歌で歌われていることなどを明らかにしている。

髙野公男（1995）は、山形市の小学校37校、中学校15校、高等学校1校、計53校の校歌を対象に、そこで謳われている景観という観点から分析している。その結果、校歌制定の年代にかかわらず「山」に分類される表現が非常に高い頻度で出現しており、景観の支配的要素となっていることなどを明らかにしている。また、議論の中心ではなく参考情報的な提示であるが、戦前から昭和20年代にかけて制定された校歌は格調高い文語体であるのに対し、昭和30年代以降は平易な口語体へ移行していることについても言及している。

中村富美子（2001）は、東京都足立区の小学校77校、中学校39校、計116校の校歌の歌詞について、ジェンダー規範という観点から分析している。その結果、5校の校歌は明らかにジェンダーに触れると思われる内容であり、いずれも「男はたくましく、女はやさしく」と期待される伝統的男女像が謳われていることを指摘している。これに関連し、「ぼくもわたしも」のように必ず男が先で女が後となっている歌詞が12.1％あることを指摘し、出過ぎず控えめをよしとする女性の美徳が歌われているようである点が、男女差別を再生産しかねないことから問題視する。

大和田道雄・加藤元子・菅政子・大高恵子・藤井裕士（1985）は、愛知県の校歌詞に関する資料も用いながら、愛知県の小・中学校約820校の校歌の歌詞について、何に関する語句が挿入されているかという観点から、人文的環境・精神的環境・自然的環境の3種の語句に分類し、県内を地域別に分析した。その結果、自然および精神に関する語句に比べ、工場や街など人文に関する語句はどの地域でも挿入率が低いことなどを明らかにしている。

月原敏博・大須賀千草（2011）は、福井県内の小学校の7割半程度にあたる165校の172校歌を対象に、地域環境的要素（自然要素、歴史・文化要素、産業要素）および校歌を歌う児童自身に言及する語句である主体的要素の観点から分析した。その結果、自然要素の一つとして歌われる山の中で最も多いのは白山であること、それが歌詞に現れるか否かは白山との近接性よりも可視性にあると考えられることなどを述べている。一方、主体的要素については、一人称的表現の出現傾向を校歌制定年と関連づけて分析している。それによると、戦前制定の校歌では一人称的表現がそもそも出現しないものが半数以上あるのに対し戦後制定の校歌では9割以上に現れていること、具体的な表現では「われら」「わが」は戦前・戦後ともに多いが、「みんな」「わたしらぼくら」「ぼくたちわたしたち」は戦後制定の校歌のみに見られる一方「己」は戦前制定の校歌のみに見られるとし、自己への言及頻度と表現形式に時代差が認められる（戦後制定の校歌の方が柔らかい表現が採られる傾向がある）ことを指摘する。

宮島幸子（2009）は、京都市の小学校45校、中学校12校、計57校の校歌の歌詞について、何を詠み込んでいるかという観点から分析した。その結果、校名はどの学校でも詠われていること、また学校の存在意義や目的を示す「学ぶ」や「学び舎」は35校の校歌で詠われていること等を明らかにしている。

松尾浩一（1997）は、和歌山市の小学校52校の校歌の歌詞について、自然や名所旧跡がどのような形で取り入れられているかという観点から分析した。その結果、城や神社等の旧跡よりも自然を取り入れた歌詞の方が多いこと、距離的にも日常生活の面でも身近な自然が取り入れられる傾向があることなどを明らかにしている。

髙嶋有里子（2014）は、明治30年頃から多くの学校で制定された校歌の歌詞内容を時代別に検討することでその時代の価値観が読み解けるのではないかという見通しから、校歌の歌詞と曲調についての詳細な分析を行っている。

永野賢（1958）は、小学校の校歌の歌詞は全児童にとって分かりやすくあるべきであるにもかかわらず実情は必ずしもそうではないことを問題として指摘している。

三浦勝也（2014）は、文語文は現在完全に過去のものとなってしまったわけではなく、新聞記事の見出しや書物の表題、少し古いところでは文部省唱歌や昭和20～30年代の歌謡曲の歌詞などで使用されることがあることを、日常の観察から指摘している。そうした領域の一つに校歌があり、戦後に設立された学校が多い高等学校においても校歌には文語体が用いられることが多いこと、それは文語が持っている「格調」が魅力となっていることを指摘している。

以上に示した先行研究を整理すると、校歌の歌詞として〈何を表現しているか〉という観点からの研究と、校歌の歌詞を〈どう表現しているか〉という観点からの研究に大別できそうである。先行研究の多くは前者の観点からのものであるが、言語研究の立場から行なった本研究では、いまだ研究が十分には進められていない〈どう表現しているか〉という観点からの研究、すなわち同じ意味を表わす表現が複数ある場合（特に古典文法による表現と現代文法による表現）、校歌ではそれぞれの表現をどの程度使っているかという観点から分析することとする。（尾崎）

3. 調査概要

分析対象とするデータは、2014年度に筆者（尾崎）が担当した大学院の授業「現代語特論」において収集した。収集作業にあたったのは、この授業の受講者であり本稿の執筆者でもある杉尾瞭子と、受講者の竹原陽子・只野智子である。

分析対象を日本全国の校歌とするのは最良であるが、授業という限られた時間の中で少人数で行うことを考えると現実的ではない。そこで地域等により対象を限定した。

地域については本学のある「岡山県」、学校の運営形態については多数を占める「公立」として進めることをまず検討した。しかし、それでもまだ学校数が多いことから、地域についてはさらに絞り込むこととした。ただし、学校数が少なすぎると十分な分析ができなくなることも考慮し、校数の多い岡山市ないしは倉敷市を対象とすることを検討した。校歌は各校のホームページで閲覧することとしたため、どの程度の学校が校歌をホームページに掲載しているかを両市で確認したところ、倉敷市の方が掲載

率が高いことが分かった。そこで本研究では、掲載／非掲載による傾向性の違いを懸念する必要性の低い倉敷市の公立の小学校・中学校・高等学校を調査対象とすることとした。ただし高等学校は県立のみとし、同じ校歌を持つ中高一貫の中学校（1校）は分析対象から除外した。また、分校･特別支援学校も今回の調査対象から除外した。

調査では、各校のホームページにアクセスして校歌の歌詞を閲覧し、データベースとして蓄積した。２番以降の歌詞も蓄積し、これも分析対象とした。一つ一つの校歌には学校名･学校種の情報も付加した。さらに、校歌の作詞者･作曲者、校歌制定年･学校設立年についてもあわせて確認し、データベースに付加した。こうした情報が不明あるいは不確かなケースについては、担当教員である尾崎から学校に文書を送付し確認した。しかしながら、特に設立が古い学校ではそれらが確認できないことが少なくなかったためか回答が得られなかったり、回答が得られてもその内容が「不明」であるケースもあり、全ての情報が確定したわけではなかった。

倉敷市の公立の学校数（2014年度時点）およびホームページでの校歌掲載校数、掲載率は次のとおりである。分母は全学校数、分子は校歌掲載校数である。校歌がホームページに掲載され分析対象としたのは計88校である。小学校は掲載率が相対的に低いが、それでも掲載率は8割を超えていることから、非掲載校を含む小学校全体の傾向は、今回のサンプルでおおよそ表わされているものと考えられる。

・小学校……51/63（81.0%）
・中学校……26/27（96.3%）
・高等学校……11/11（100.0%）

・全　体……88/101（87.1%）

表1は学校設立年と校歌制定年の分布である。1940年代は戦前と戦後に分けた。

表１　学校設立年および校歌制定年の分布

	学校設立年				校歌制定年			
	全　体（88校）	小学校（51校）	中学校（26校）	高等学校（11校）	全　体（88校）	小学校（51校）	中学校（26校）	高等学校（11校）
1870年代	33	33						
1880年代	1	1						
1890年代	1	1						
1900年代	5	3		2				
1910年代	1			1				
1920年代	2	1		1				
1930年代	1			1				
1940年代[前半]	2	1		1				
1940年代[後半]	19	2	16	1	4	2	1	1
1950年代	3	1	2		14	6	6	2
1960年代	6	3	2	1	16	11	3	2
1970年代	5	2	2	1	9	7	1	1
1980年代	7	2	4	1	6	2	3	1
1990年代	0				1			1
2000年代	2	1		1	1			1
不確定					8	3	4	1
不明					29	20	8	1

学校設立年については「不明」や「不確定」はなく（「不確定」とは「○○年頃」のように幅を持つ年数までは分かっているケース）、全て確定している。これによると、小学校の設立は1870年代に集中する。これに対し中学校は全て戦後であり、特に戦後すぐの時期に集中する。高等学校は特に集中する時期はなく、1900年以降の戦前・戦後に広く分散する。学校数は小学校と中学校が多いことから、学校設立年は、全体として1870年代と戦後すぐの時期に集中する。

一方、校歌制定年は全て戦後である。特に1950年代～60年代は校歌制定年のピークであり、その後は新たに設立される学校もそれほど多くないため（特に1990年代以降）、新たに制定される校歌も減少傾向となる。全体としては、戦後すぐの時期から1980年代までの40～50年の間に制定された校歌を分析対象とすることになる。なお、学校設立年と異なり、校歌制定年には「不明」も少なくない点には留意しなければならない。特に小学校では約4割が「不明」である。

表２は学校設立年と校歌制定年の相関を示したものである。横軸の校歌制定年は戦後から示した。

表２　学校設立年と校歌制定年の相関分布

学校設立年＼校歌制定年	1940年代【後半】（4校）	1950年代（14校）	1960年代（16校）	1970年代（9校）	1980年代（6校）	1990年代（1校）	2000年代（1校）	不確定（8校）	不明（29校）
1870年代（33校）	2	5	7	3				3	13
1880年代（1校）			1						
1890年代（1校）									1
1900年代（5校）		1		1				1	2
1910年代（1校）									1
1920年代（2校）			1						1
1930年代（1校）	1								
1940年代【前半】（2校）		2							
1940年代【後半】（19校）	1	5	3			1		1	8
1950年代（3校）		1		1				1	
1960年代（6校）			4	1				1	
1970年代（5校）				3				1	1
1980年代（7校）					6				1
1990年代（0校）									
2000年代（2校）							1		1

二重枠で示した右下がりのセルは学校設立年と校歌制定年が同じ年代、すなわち学校設立とほぼ同時に校歌が制定されたケースである。1980年代を除きこのようなケースは意外と少なく、多くの学校ではしばらくしてから、あるいはかなり経過してから校歌が制定されている。

学校の設立は1870年代であるが校歌の制定は戦後の1950～60年代というケースが少なくない。また、校歌制定年が「不明」のうちの半数近くは、学校設立年が1870年代の学校である。そもそも学校（小学校）の設立自体がこの年代に多かったことがこの数値の高さに関係していようが、今から1世紀半近く前の設立であるために、校歌の制定年に関する記録が十分に確認できないケースもあったことが推測される。

こうしたデータであることをふまえつつ、次節では分析結果を示す。　（尾崎）

4. 分析

4.1. 動詞・助動詞の活用形からの分析

収集した歌詞を概観すると、歌詞に動詞・助動詞が含まれる場合、古典文法の二段活用と、現代文法の一段活用の両方が現れていることに気づく。そこで本節では、校歌の歌詞全体としてはどのような状況であるのか、また学校種別に分析した場合どのような違いが見られるのか等について分析を行う。

4.1.1. 分析対象

分析の際に注意すべきは、校歌によっては二段活用の動詞・助動詞も一段活用の動詞・助動詞も現れないケースがあることである。これらも母数に含め、たとえば二段活用を含む校歌の割合を計算しても意味がない。そこで、二段活用ないしは一段活用の動詞・助動詞を含む校歌のみを母数とし、その中で二段活用・一段活用の内訳がどのようになっているのかを分析した。野球にたとえて言えば、まず打席数を確定してからヒットの数と打率を計算するようなものである。なお、二段活用と一段活用の対立が見られるのは終止形と連体形であり（たとえば連体形であれば「流る<u>る</u>川」「流れ<u>る</u>川」のように対立する）、未然形などは対立がない（二段活用でも「流れ<u>ぬ</u>」であるし一段活用でも「流れ<u>ない</u>」となりいずれも「流れ<u>れ</u>」となって対立しない）。そこで、本分析では、終止形または連体形で出現したケースのみを分析対象とする。

図 1 は、分析対象となる動詞・助動詞（二段活用／一段活用の終止形／連体形）を校歌の歌詞に含むか否かを分析した結果である。

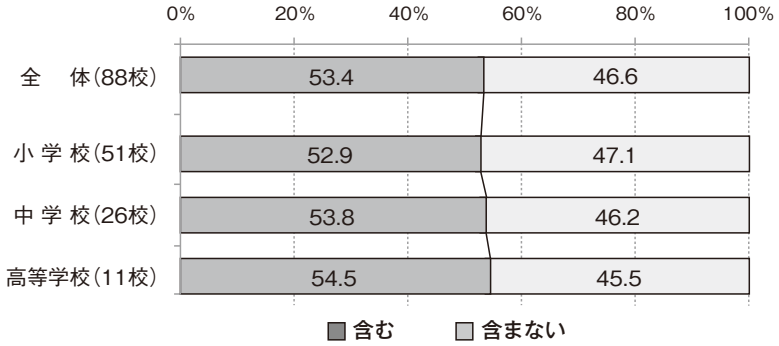


図 1　分析対象とする動詞・助動詞の含有校率

これによると、校歌の歌詞に二段活用ないしは一段活用の動詞・助動詞（ただし終止形か連体形）を含むものはおよそ半数にとどまることがわかる。学校種による違いはほとんどない。「含む」の学校数（＝校歌数）は、全体 47 校、小学校 27 校、中学校 14 校、高等学校 6 校である。以下ではこれらを実際の分析対象とする。

4.1.2. 活用形による分析 (1) －二段活用か一段活用か－

47 校の校歌の歌詞において、現代文法（一段活用）が使われているか、それとも古典文法（二段活用）が使われているかという観点から分析した結果が図２である。

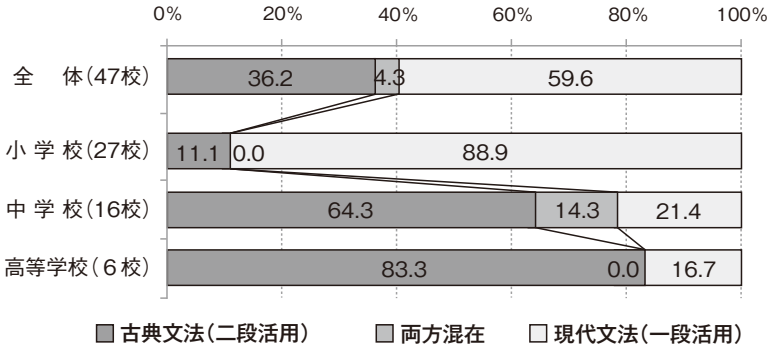


図２　動詞・助動詞の活用形の分析

これによると、全体としては現代文法（一段活用）が約６割と優勢であるが、古典文法（二段活用）も約４割と少なくないことがわかる。

少数ではあるが、二段活用と一段活用の両方を含む学校も見られる（2 校）。2 番に「あふれる慈愛」（一段活用）、3 番に「悔ゆるなく」（二段活用）を含む中学校の校歌などが該当する。

学校種による違いが明確に認められる。小学校の校歌では現代文法の一段活用が非常に優勢であるのに対し、中学校・高等学校の校歌では古典文法の二段活用の方がむしろ優勢である。学校教育で古典文法をまだ学んでいない小学校の児童への配慮によるところが少なくないものと考えられる。古典文法による表現には格調の高さを伴うが、それよりも現代文法による表現の分りやすさや親しみやすさを優先したものであろう。

4.1.3. 活用形による分析 (2) －終止形か連体形か－

二段活用か一段活用かについて、それらが終止形で現れるか、それとも連体形で現れるかという観点からさらに分析した。すなわち、二段活用であれば「川が流る。」のような終止形で現れやすいか、それとも「流るる川」のような連体形で現れやすいか、また一段活用であれば「川が流れる。」のような終止形で現れやすいか、それとも「流れる川」のような連体形で現れやすいかという観点から分析する。1 つの校歌に終止形と連体形の両方が現れるケースもあることから、ここでは校数ではなく表現の件数（異なり件数）から分析した。たとえば校歌に終止形が3回、連体形が1回現れる場合も、ここでは連体形「1」、終止形「1」というカウントの仕方（つまりこの校歌では連体形と終止形が現れたという考え方）をとる。

一段活用は全体で 34 件、二段活用は全体で 19 件あったが、それぞれの終止形／連

体形の内訳は図３のようであった。なお、現代文法に現れる「不確定」とは、「かねが聞こえる円通寺」のようなケースである。「聞こえる」は「円通寺」にかかる連体形とも解釈できるが、倒置表現がありうる詩においては「かねが聞こえる。円通寺（で／から）」として終止形とも解釈できる。現代文法では終止形と連体形が同形となるため、文脈によってはこのように終止形か連体形かが確定しがたいケースがある。

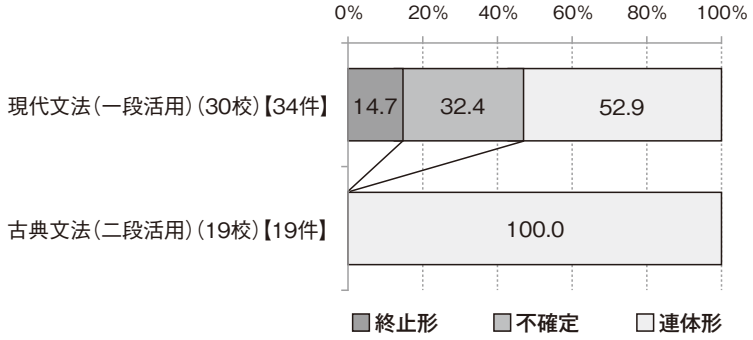


図３　終止形・連体形との組み合わせによる動詞・助動詞の活用形の分析

これによると、現代文法（一段活用）は終止形でも連体形でも現れる（ただし確定できるケースでは連体形の方が多い）。これに対し古典文法（二段活用）は連体形でしか現れず、終止形で現れることはない。「～ぞ～あふるる。」のような係り結びによる文末の連体形はなく、全て体言にかかる用法か、「悔ゆるなく」「究むるは」のように動詞のかかる体言が想定される用法としての連体形である。つまり、古典文法で現れる場合は、「燃ゆる花」（連体形）は校歌の歌詞としてありえても、「花燃ゆ」や「花は燃ゆ」（終止形）はありえないということである。

このことを“90 度回転して”考えると、連体形は現代文法でも古典文法でも現れるが、終止形は現代文法でしか現れないということになる。

こうした片寄った分布がなぜ生じるのかについては、校歌以外の詩などにおける出現状況とも関連づけ、また日本語の変化とも関連づけ、さらに考えてゆきたい。

4.1.4. 学校設立年からの分析

二段活用か一段活用かについては、学校設立年や校歌制定年との関係も考えられそうである。すなわち、古い時代に設立され校歌制定年も古い学校の校歌では二段活用が多いのに対し、最近設立され校歌制定年も新しい学校の校歌では一段活用が多いということが考えられる。

まず、学校設立年との関係を見てみよう。結果は表 3-1 ～表 3-4 のとおりであった。

表 3-1 学校設立年と活用形（全体）

古典文法（二段活用）	学校設立年	現代文法（一段活用）
2	1870 年代（17 校）	15
	1880 年代（1 校）	1
	1890 年代（0 校）	
1	1900 年代（2 校）	1
1	1910 年代（1 校）	
1	1920 年代（2 校）	1
1	1930 年代（1 校）	
1	1940 年代［前半］（1 校）	
8	1940 年代［後半］（9 校）	3
	1950 年代（2 校）	2
2	1960 年代（4 校）	2
	1970 年代（2 校）	2
1	1980 年代（4 校）	3
	1990 年代（0 校）	
1	2000 年代（1 校）	

表 3-2 学校設立年と活用形（小学校）

古典文法（二段活用）	学校設立年	現代文法（一段活用）
2	1870 年代（17 校）	15
	1880 年代（1 校）	1
1	1890 年代（2 校）	1
	1900 年代（0 校）	
	1910 年代（0 校）	
	1920 年代（1 校）	1
	1930 年代（0 校）	
	1940 年代［前半］（0 校）	
	1940 年代［後半］（1 校）	1
	1950 年代（1 校）	1
	1960 年代（1 校）	1
	1970 年代（1 校）	1
	1980 年代（2 校）	2
	1990 年代（0 校）	
	2000 年代（0 校）	

表 3-3 学校設立年と活用形（中学校）

古典文法（二段活用）	学校設立年	現代文法（一段活用）
	1870 年代（0 校）	
	1880 年代（0 校）	
	1890 年代（0 校）	
	1900 年代（0 校）	
	1910 年代（0 校）	
	1920 年代（0 校）	
	1930 年代（0 校）	
	1940 年代［前半］（0 校）	
8	1940 年代［後半］（8 校）	2
	1950 年代（1 校）	1
2	1960 年代（2 校）	
	1970 年代（1 校）	1
1	1980 年代（2 校）	1
	1990 年代（0 校）	
	2000 年代（0 校）	

表 3-4 学校設立年と活用形（高等学校）

古典文法（二段活用）	学校設立年	現代文法（一段活用）
	1870 年代（0 校）	
	1880 年代（0 校）	
	1890 年代（0 校）	
	1900 年代（0 校）	
1	1910 年代（1 校）	
1	1920 年代（1 校）	
1	1930 年代（1 校）	
1	1940 年代［前半］（1 校）	
	1940 年代［後半］（0 校）	
	1950 年代（0 校）	1
	1960 年代（1 校）	
	1970 年代（0 校）	
	1980 年代（0 校）	
	1990 年代（0 校）	
1	2000 年代（1 校）	

注:「全体」および「中学校」の「1940 年代［後半］」には、古典文法と現代文法の両方を含む学校が 2 校ある。

これによると、二段活用か一段活用かについては、学校設立年による明確な違いはなさそうである。最も古い 1870 年代について「全体」を見ると一段活用の方がむしろ多くなっている。これは、校歌の歌詞に一段活用の多い小学校の設立がこの時期に集中したことが影響している。学校種ごとに見ても、時代による明確な違いは認めがたい。小学校においては、1870 年代設立の学校からすでに一段活用に大きく傾いている点が注目される。

4.1.5. 校歌制定年からの分析

同様に、校歌制定年から分析した結果が表 4-1 ～表 4-4 である。

表 4-1 校歌制定年と活用形（全体）

古典文法（二段活用）	校歌制定年	現代文法（一段活用）
1	1940 年代［後半］（2 校）	1
4	1950 年代（8 校）	4
3	1960 年代（9 校）	6
	1970 年代（4 校）	4
1	1980 年代（3 校）	2
	1990 年代（0 校）	
1	2000 年代（1 校）	
2	不確定（3 校）	1
7	不明（17 校）	12

表 4-2 校歌制定年と活用形（小学校）

古典文法（二段活用）	校歌制定年	現代文法（一段活用）
	1940 年代［後半］（1 校）	1
	1950 年代（3 校）	3
1	1960 年代（6 校）	5
	1970 年代（3 校）	3
	1980 年代（2 校）	2
	1990 年代（0 校）	
	2000 年代（0 校）	
	不確定（1 校）	1
2	不明（11 校）	9

表 4-3 校歌制定年と活用形（中学校）

古典文法（二段活用）	校歌制定年	現代文法（一段活用）
	1940 年代［後半］（0 校）	
3	1950 年代（4 校）	1
1	1960 年代（1 校）	
	1970 年代（1 校）	1
1	1980 年代（1 校）	
	1990 年代（0 校）	
	2000 年代（0 校）	
2	不確定（2 校）	
4	不明（5 校）	3

表 4-4 校歌制定年と活用形（高等学校）

古典文法（二段活用）	校歌制定年	現代文法（一段活用）
1	1940 年代［後半］（1 校）	
1	1950 年代（1 校）	
1	1960 年代（2 校）	1
	1970 年代（0 校）	
	1980 年代（0 校）	
	1990 年代（0 校）	
1	2000 年代（1 校）	
	不確定（0 校）	
1	不明（1 校）	

注：「全体」および「中学校」の「不明」には、古典文法と現代文法の両方を含む学校が 2 校ある。

校歌制定年による明確な違いもなさそうである。小学校の校歌は、どの年代に制定されたものであっても一段活用に大きく傾くのに対し、中学校や高等学校はむしろ二段活用にやや傾く。

以上から、二段活用か一段活用かについては、少なくともこのデータで見る限り、学校設立年や校歌制定年との明確な関係はないと言える。むしろ、いつの時代においても学校種との関係の方が大きい。（尾崎）

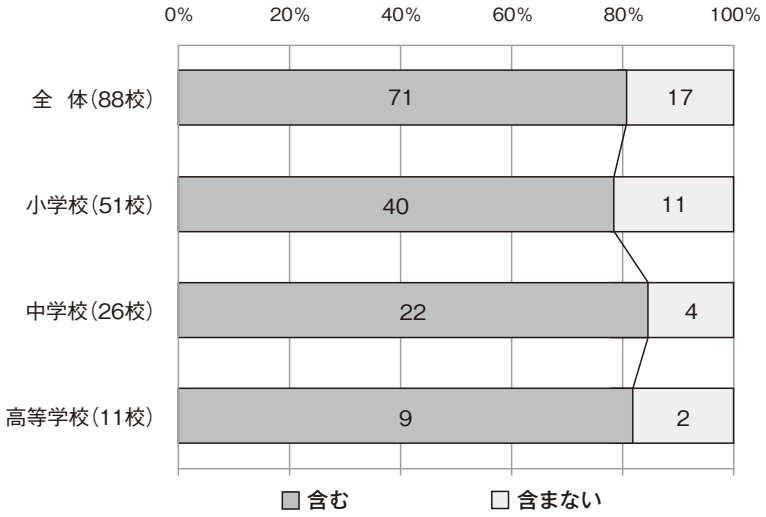
4.2. 形容詞および動詞の音便化からの分析

本節では、校歌の歌詞に現れる形容詞の連体形、および、五段活用動詞の連用形について、音便化の有無（現代文法であるか、古典文法であるか）に着目した分析を行う。

4.2.1. 形容詞（連体形）の分析

校歌の歌詞において形容詞が現れる際、「高き理想」のような古典文法での表現と、「高い理想」のように活用語尾が音便化された現代文法での表現が考えられる。ここでは形容詞の活用のうち、古典文法と現代文法で語形に明確な違いがある連体形に注目し、校歌の歌詞を分析する。

まず、収集した88校の校歌について、分析対象とする形容詞の連体形が校歌の歌詞に含まれるか否かを確認する。図４は、その結果について示したものである。



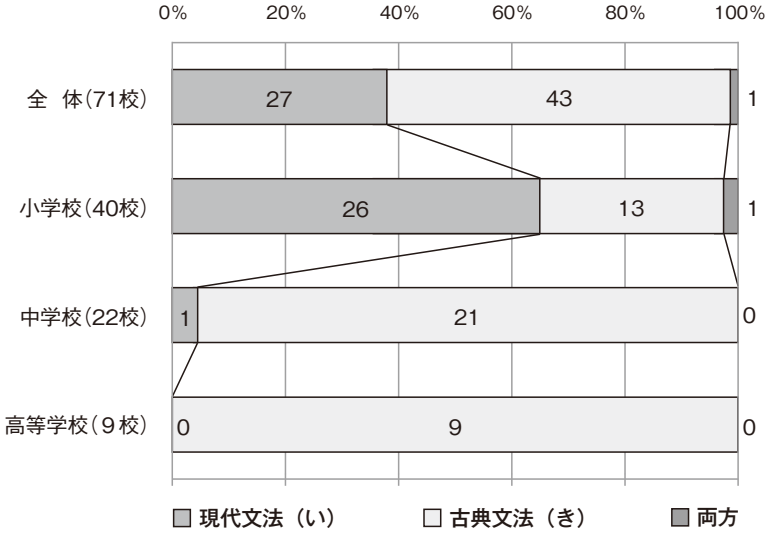
（グラフ内の数値は学校数）

図４　校歌の歌詞に形容詞の連体形を含む学校数

校歌の歌詞に形容詞の連体形を含む学校は、全体で71校（81％）であり、小学校では40校（78％）、中学校では22校（85％）、高等学校では9校（82％）である。一方、これを除く17校の校歌は、形容詞が歌詞に含まれない、または、形容詞は含むものの連体形の語形では現れない校歌である。ここでは、校歌の歌詞に形容詞の連体形を含む71校について、音便化の有無の観点からその内訳を分析する。

（1）音便形・非音便形の割合

71校の校歌について、歌詞に現れる形容詞が現代文法で書かれているか、古典文法で書かれているかという観点から分析した結果が図５である。



（グラフ内の数値は学校数）

図５　校歌における形容詞（連体形）の表現

形容詞の連体形について、まず全体としては、古典文法（非音便形）である「～き」で書かれた校歌が43校（61％）であり、現代文法（音便形）である「～い」で書かれた校歌の数を上回っている。このことから、校歌の歌詞においては、日常会話で用いられる現代文法よりも古典文法による表現が多く用いられることが考えられる。

続いて、学校種別の傾向を分析する。小学校では、全体の傾向とは対照的に現代文法で書かれた校歌が約６割を占めており、古典文法で書かれた校歌よりも多い。これに対して、中学校と高等学校については、中学校１校を除くすべてが古典文法で書かれた校歌である。このように、小学校と中学・高校との間で校歌の文体の傾向に明確な違いがみられる。また、現代文法である「～い」の形は、中学校では１校の校歌にしかみられず、高等学校については全くみられないことから、ほぼ小学校の校歌に限定される表現であるといえよう。小学校の校歌において現代文法が多く用いられる理由としては、古典文法よりも現代文法の方が話し言葉に近く、児童に歌詞の意味が理解されやすいということが考えられる。また、古典の学習が小学校においてはまだ行われず、中学校以降において行われることも深く関わっていると推察される。

なお、小学校の校歌において、現代文法と古典文法の両方が混在しているものが１校にのみみられた。歌詞の一部を抜粋すると、「清きふるさと　明るい学び舎　若い生命に　つちかうところ」というものである。この校歌では「清き」のみが古典文法であり、その他の形容詞は「明るい」「若い」のように現代文法となっている。このように、現代文法の形容詞であるか古典文法の形容詞であるかが、単語によって異なっている例も、１例ではあるが存在する。

(2) 校歌における形容詞の語彙

現代文法による校歌と、古典文法による校歌で、用いられる形容詞の語彙に差異はあるであろうか。先述のように、単語によって表現を使い分ける校歌がみられたことから、形容詞によって、現代文法で書かれやすい語や古典文法で書かれやすい語が存在する可能性が考えられる。ここでは、校歌の歌詞にみられる形容詞の具体的な単語から考察を行うこととする。

表5は、校歌に現れる形容詞（ただし分析対象である連体形のものに限る）を、現代文法によるものと古典文法によるものそれぞれについて、多い順に示したものである。

表5　校歌に使われている形容詞（連体形のみ）

【現代文法】

明るい	13
よい	12
青い	8
若い	7
白い	6
強い	6
楽しい	6
正しい	3
遠い	3
やさしい	2
高い	1
清い	1
あつい	1
美しい	1
古い	1
広い	1
ながい	1
かたい	1
つらい	1
雄々しい	1
まぶしい	1
かしこい	1

【古典文法】

高き	15
若き	12
清き	10
あつき	6
ゆたけき	6
正しき	4
美しき	3
古き	3
広き	3
濃き	3
新しき	3
うるわしき	3
深き	3
よき	2
青き	2
白き	2
強き	2
ながき	2
かたき	2
赤き	2
なき	2
尊き	2

ゆかしき	2
さやけき	2
はるけき	2
遠き	1
やさしき	1
気高き	1
限りなき	1
あたたかき	1
かぐわしき	1
しるき	1
しげき	1
すがしき	1
静けき	1
やすらけき	1

（表の数値は学校数を示す。網掛けは一方にのみみられる語彙。）

まず、現代文法で書かれた形容詞についてみていく。現代文法の形をとるもので最も多いのは「明るい」である。「明るい」は、「明るい光」「明るい○○（学校名）」のように用いられ、すべてが小学校の校歌に現れている。一方、これを古典文法で言い換えた「明るき」は、どの学校種の校歌にもみられない。二番目に多いのは「よい」である。「よい」についても、小学校の校歌においてのみみられ、特に「よい子」の

形で多く用いられている。これを古典文法で言い換えた「よき」は2校にみられるが、「よい」の12校よりも少ない数値である。

続いて、古典文法で書かれた形容詞に注目する。古典文法の形をとるもので最も多いのは「高き」であり、「高き理想」等の形で登場する。一方、これを現代文法に言い換えた「高い」は1校にしかみられない。三番目に多い「清き」についても、「清き」が10校であるのに対して「清い」は1校のみであることから、同様の傾向がうかがえる。このことから、「高い」「清い」はいずれも「高き」「清き」の形で校歌に詠われる傾向にあると考えられる。また、古典文法で書かれる形容詞においては、現代語の形容詞にはない古典独自の「ゆたけき」「さやけき」「しげき」等の語彙がみられる。

(3) 校歌制定年との関連（小学校）

形容詞の音便化の有無については、校歌制定年との関連がみられる可能性がある。そのため、校歌制定の年代によって古典文法の校歌と現代文法の校歌の割合がどうであるか、分析を行う。

ただし、中学校と高等学校においては、校歌の収集数が少ないことに加え、校歌の歌詞中にある形容詞の表現が古典文法に大きく偏っているため、この観点からの分析は困難である。一方、小学校においては、現代文法によって書かれた校歌が多数ではあったが、古典文法で書かれた校歌も一定数（約3割）存在する。したがって、ここでは現代文法の校歌と古典文法の校歌の両方が一定数みられる小学校に校種を限定し、校歌制定年代ごとの傾向を分析する。

形容詞の連体形を校歌に含む小学校40校のうち、校歌制定年が判明している（推定を含む）のは25校である。その中で特に校歌の制定が集中している1950年代から1970年代に制定された校歌について、形容詞が現代文法である校歌と古典文法である校歌の数はそれぞれ次の通りであった。

【1950年代】　現代文法…3校　　古典文法…2校
【1960年代】　現代文法…9校　　古典文法…1校
【1970年代】　現代文法…4校　　古典文法…0校

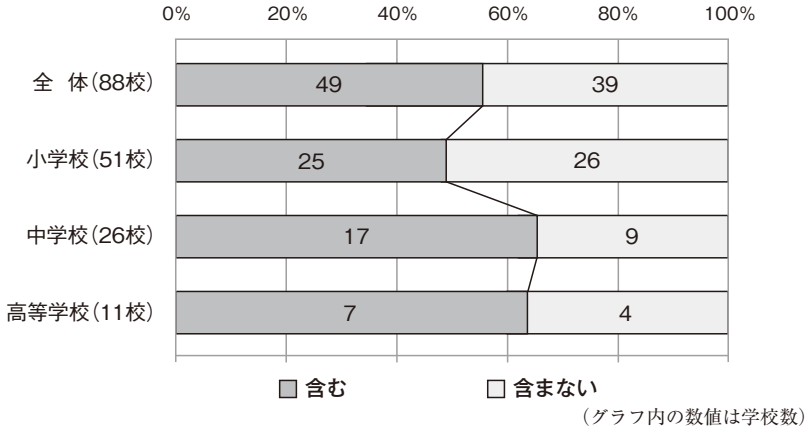
1950年代に制定された校歌については、現代文法の校歌と古典文法の校歌がほぼ同数であるが、1960年代制定のものでは古典文法の校歌よりも現代文法の校歌の数が目立ち、さらに1970年代制定の校歌になると、古典文法の校歌はみられず現代文法の校歌のみであった。

このように、倉敷市の場合、1960年代以降に作られた小学校の校歌は、ほとんどが現代文法で書かれている。制定年のわからない校歌が少なくないという点を考慮する必要はあるが、校歌制定年との関係から、小学校の校歌における形容詞に関しては、1960年頃を境に現代文法での表現が主流になってきた可能性が考えられる。

4.2.2. 五段活用動詞（連用形）の分析

形容詞（連体形）の音便化に続き、ここでは五段活用動詞（連用形）の音便化に着目し校歌の分析を行う。校歌の歌詞において、動詞が接続助詞「て（で）」に接続する際、連用形が「輝いて」（イ音便）、「手を取って」（促音便）、「育んで」（撥音便）のように音便化する現代文法での表現と、「輝きて」「手を取りて」「育みて」のように音便化しない古典文法での表現とが考えられる。

ここで分析対象とする動詞は音便化の有無による言い換えが可能である五段活用の動詞のみとし、したがって「浴びて」（一段活用）のような音便化の有無による言い換えができない活用の動詞に関しては、「動詞＋て（で）」の形であっても対象から除外した。収集した校歌のうち、分析対象となる校歌の割合は、次の図６の通りである。



（グラフ内の数値は学校数）

図６　校歌の歌詞に「五段活用動詞＋て（で）」を含む学校数

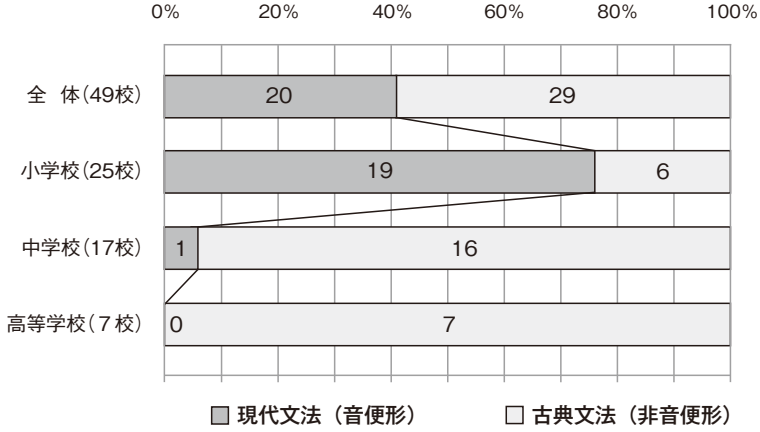
今回の調査で収集した 88 校の校歌のうち、分析対象となるのは全体で 49 校（56％）であり、小学校では 25 校（49％）、中学校では 17 校（65％）、高等学校では 7 校（64％）である。「五段活用動詞＋て（で）」の形を歌詞に含む校歌は全体で 6 割近くにとどまり、全体の 8 割にみられた形容詞の連体形と比較すると、校歌の歌詞に現れにくい表現であることが窺える。ここでは対象とする語形を含む 49 校について、その内訳を分析する。

なお、五段活用動詞に関しては、形容詞よりも分析対象となる校歌数が少ないため、形容詞の項で行った、語彙の相違や校歌制定年との関連といった詳細な分析を行うには不十分な数であると考えられる。したがって、本項では表現の内訳についてのみ分析を行うこととする。

（1）音便形・非音便形の割合

「五段活用動詞＋て（で）」の語形を歌詞に含む 49 校の校歌について、五段活用動詞が現代文法（音便形）で書かれているか、古典文法（非音便形）で書かれているか

という観点から分析した結果が図７である。



（グラフ内の数値は学校数）

図７　校歌における五段活用動詞（連用形）の表現

全体としては、非音便形である古典文法での表現が 29 校（59%）の校歌にみられ、約 6 割を占めている。このことから、校歌の歌詞においては、動詞の場合も形容詞の場合と同じく古典文法での表現の方が多いことが考えられる。

続いて、学校種別にみると、小学校では現代文法（音便形）による表現が 8 割近くであり、古典文法（非音便形）による表現よりも高い割合を占めている。しかし、反対に中学校と高等学校においては、中学校の 1 校を除くすべてが古典文法である。このことから、小学校と中学・高校との間で動詞の連用形の表現に明確な違いが認められる。この結果についても、形容詞の場合と類似している。

(2) 形容詞（連体形）の音便化との関連性

五段活用動詞についても、形容詞と同様に、古典文法（非音便形）での表現と現代文法（音便形）での表現の二通りがみられた。ここでは、このような音便化の有無が各校歌の中で統一されるのかどうかを、「五段活用動詞＋て（で）」と形容詞連体形の両方が歌詞に現れる校歌を分析することによって確認したい。

「五段活用動詞＋て（で）」の語形を含む 49 校の校歌のうち、そこに形容詞の連体形も現れる 39 校について、形容詞の連体形の音便化との関係を表６にまとめた。なお、現代文法での表現と古典文法での表現が混在している校歌については、両方にカウントをした。

これによると、動詞が現代文法（音便形）である校歌においては、形容詞も同じく現代文法（音便形）で書かれ、また、動詞が古典文法（非音便形）の校歌においては、形容詞も同じく古典文法（非音便形）で書かれる傾向にあることがわかる。

一方、動詞が現代文法で書かれた校歌の中で、古典文法の形容詞が使われている校歌が 1 件のみみられた（*印）が、この校歌には古典文法の形容詞とともに現代文法

表６　校歌の歌詞における音便化の有無（校）

動詞 ＼ 形容詞	現代文法（音便形）	古典文法（非音便形）
現代文法（音便形）	15	0
古典文法（非音便形）	*1	24

の形容詞も同時に使われており、なおかつ歌詞にある５つの形容詞のうち４つに関しては現代文法での表現であった。そのため、該当する１校の校歌については、古典文法の形容詞も使われてはいるものの、傾向としては現代文法寄りの校歌であるということになろう。また、動詞が古典文法で形容詞が現代文法である校歌はみられなかった。

このことから、動詞と形容詞の音便化の有無（現代文法で書くか、古典文法で書くか）は、原則として各校歌の中で統一されることが考えられる。今回の分析では動詞と形容詞のみを対象としたが、古典文法と現代文法で対立がみられる他の観点についても同様の結果が得られるか否か、今後さらなる分析が必要となるであろう。（杉尾）

5. まとめと今後の課題

以上、校歌の歌詞について言語学的観点から分析を行った。その結果、次のことが明らかになった。

（1）動詞・助動詞について、古典文法（二段活用）で現れるか現代文法（一段活用）で現れるかという観点から分析したところ、小学校の校歌では現代文法（一段活用）に大きく傾くのに対し、中学校・高等学校の校歌では古典文法（二段活用）に傾くことがわかった。学校設立年や校歌制定年との明確な関係は認められない。

（2）形容詞連体形と五段活用動詞連用形について、古典文法（非音便形）で現れるか現代文法（音便形）で現れるかという観点から分析したところ、いずれも全体としては古典文法（非音便形）に傾くが、中学校と高等学校の校歌がほぼすべて古典文法（非音便形）であるのに対して、小学校の校歌はむしろ現代文法（音便形）の方が多く現れることがわかった。特に小学校の校歌における形容詞に関しては、1960 年頃を境に現代文法での表現が主流となった可能性がある。

今回の分析では、動詞・助動詞の活用形、形容詞・動詞の音便形といった具体的な事象に着目し、それぞれ個別に分析を行った。これだけでも得られた知見は少なくないが、これらの事象はおそらく別々のふるまいをするのではなく、ちょうど形容詞の音便形／非音便形と動詞のそれとの間に強い相関関係が認められたように、相互に関連性や一貫性を持ちつつ、全体として文語的（古典語的）歌詞、口語的（現代語的）歌詞を構成しているものと考えられる。そうであるならば、今後は両者を関連づけ、〈総合〉という方向でさらに分析を進める必要がある。その際、最終的には、たとえば「思い出す」に対する「思いいずる」のような語彙レベルの選択等までも含めてより総合

的に分析を行なうことが望まれる。

こうした言葉自体の分析に加え、校歌制定年が不明の学校が少なくないため困難が予想されるが、校歌が制定された当時の作詞者の年齢や作詞者の生年という観点からの分析も試みる価値はおおいにある。

先行研究で得られた知見との違いも一部あった。戦前から昭和 20 年代にかけて制定された校歌は格調高い文語体であるのに対し、昭和 30 年代以降は平易な口語体へ移行しているとする髙野公男（1995）の指摘は、今回行った分析のうち小学校の校歌における形容詞の音便形／非音便形についてはほぼ同様のことが言えるが、それ以外はあてはまらなかった。これをどう考えるかも今後の課題としたい。　（尾崎・杉尾）

参考文献

大和田道雄・加藤元子・菅政子・大高恵子・藤井裕士（1985）「環境教育への気候学的アプローチ―小・中学校校歌詞と地域性―」『愛知教育大学教科教育センター研究報告』 9

佐々木力（2007）「秋田県雄物川本流域における小中高等学校歌詞に表現されている環境要素」『秋大地理』54

髙嶋有里子（2014）『校歌をめぐる表象文化研究―近代国家成立における校歌の制定過程と現代の諸状況をてがかりに―』（日本大学大学院芸術学研究科博士後期課程芸術専攻 平成 25 年度学位請求論文）

髙野公男（1995）「山形市の校歌に見る地域景観」『東北芸術工科大学紀要』 2

月原敏博・大須賀千草（2011）「校歌で何を歌うか？―福井県内小学校の校歌と地域環境―」『福井大学教育地域科学部紀要（社会科学）』 1

永野賢（1958）「校歌の歌詞」『言語生活』83

中村富美子（2001）「これでいいの？ 校歌の歌詞は―校歌のジェンダーチェック―」『Sexuality』 3

松尾浩一（1997）「校歌の歌詞にみられる地名等の名称について―和歌山市内 52 小学校を例として―」『和歌山地理』17

三浦勝也（2014）『近代日本語と文語文―今なお息づく美しいことば―』（勉誠出版）

宮島幸子（2009）「校歌の歌詞にみる心の原風景」『京都文教短期大学研究紀要』48

付記

本稿は、ノートルダム清心女子大学日本語日本文学会第 18 回大会（2015 年 6 月 20 日）における口頭発表「校歌の歌詞に関する言語学的分析－倉敷市の公立学校の場合－」（尾崎喜光・杉尾瞭子・只野智子）をもとに、尾崎と杉尾の発表箇所を加筆・修正したものである。当日コメントをくださった参加者の皆様に感謝申し上げる。

九七

（おざき　よしみつ／本学教授）

（すぎお　りょうこ／本学大学院生）